

【実施日時・場所】令和5年6月10日（土）13:00~17:00（オンラインとのハイブリット開催）

【参加人数】22名（小学校：18名 中学校：1名 指導主事：名 大学：1名 学生：1名 民間：1名）

【研修のねらい】

- 論文を書こうとは思いますが、執筆に踏み切れない人の背中を、講座を通して勇気づけ、論文を書くことができるようにする。
- ソニー教育財団の示す2つの論文の特色を理解し、それぞれの論文の書き方とそのコツを経験者の話から理解する。
- 論文を書くことで日々の実践を整理・分析したり、次年度への計画を立てたりなど、授業の改善へつながる論文の良さを感じることができる。

【研修の様子】

○ 「ソニー論文の思い出と、これからの理科教育について考えること」

福島大学 准教授 鳴川 哲也 先生

ソニー論文の思い出話は、笑いあり、格言ありでした。お話を聞いて、大先輩方が築き上げたこの「ソニー論文の歴史」や、「常に子どもから学ぶ姿勢」を引き継ぎ、大切にしていきたいと思いました。

次に、これからの理科教育について、「問題解決」の視点で考えました。「なぜ理科を勉強するのか」と言われたとき我々教師は答えをもっているのでしょうか。理科を学ぶことで、知識を獲得しますし、その知識があるかないかで自然の事物・現象に対する見方が違ってきます。このように、知識を獲得することも理科では重要です。しかし、「問題を発見し解決していく」ことがさらに重要であると話されました。そもそも「問題」とは、

- ① 現在の状況と望ましい状況のズレから生じるもの（「よりよくしたい」＝個人のウェルビーイング）
- ② 現在の状況と対象に対する認識のズレ（「もっとくわしく＝自然の認識を深める」）

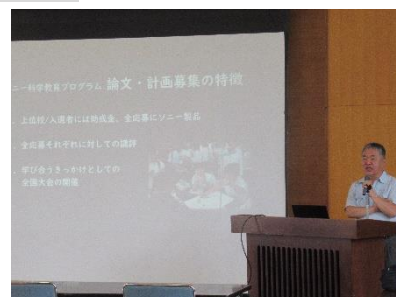
があって、A区分（物質・エネルギー）とB区分（生命・地球）で問題発見に特徴があります。どちらの問題も、因果関係を探って追究し、科学的なアプローチで解決していくことが大切であることが分かりました。さらに鳴川先生のお話から、子ども自身が「科学的に問題解決することのよさ」を見出し、自らの生活をより豊かにしていく（「ウェルビーイング」）、そんな理科教育を実践していきたいと思いました。



○ 「論文の詳細と応募の説明」

ソニー教育財団 島田 勝裕 様

「教育実践論文」と「未来へつなぐ教育計画」の募集の特徴についてお話いただきました。「教育実践計画」は名前を変えて「未来へつなぐ教育計画」となりました。どちらも全教科対象の募集になったことで、授業実践の幅が広がり、より多くの先生方にチャレンジしてもらえるようになっていきます。また、島田様から論文の書き方のポイントをいくつか教えていただきました。その中でも「子どもの姿がたくさんほしい」という言葉が印象的でした。主題に対してどのような手立てで科学が好きな



子どもを育てるのか、そしてその学びをしている子どもの表情や声はどうであったか、「Before⇒After」をぜひ記録をしていただき、先生方の個性ある事例・実践をお待ちしておりますと、笑顔で話されました。

その後の質疑応答では、「教育実践論文」と「未来へつなぐ教育計画」の論文では、どちらも全応募者にソニー製品と審査講評がいただけますが、そのソニー製品に大きな差はないということが分かりました。また、「未来へつなぐ教育計画」については、管理職（校長・副校長・教頭）の先生は論文を書くことはできませんので、「教育実践論文」にて積極的に校内の先生方に声をかけ、一緒に実践をまとめていただければとのことでした。

○ 論文執筆経験者の体験談

☆ 福島市立大笹生小学校（代表） 渡邊 佑斗 先生

佑斗先生は「教育実践論文」を執筆されました。論文を書く決心がつくまでのお話から、情報収集・執筆開始・執筆中・完成と、その後の変化を教えてくださいました。「何から始めればよいか分からない」「とりあえず書いてみよう」など佑斗先生の素直な気持ちから論文を執筆されていく様子を知ること、論文を書いたことがない人にとって共感することが多く、「チャレンジしたい!」と思えてくる発表でした。



☆ 福島市立大森小学校 佐々木 雄一郎 先生

雄一郎先生は「教育実践計画」を執筆されました。論文を書いたきっかけや、テーマ設定・子どもの現状把握（アンケート）・2年間を見越した授業計画・実践の様子などを詳しく教えてくださいました。自身の足を運んでの教材選びや、福島の自然を生かした授業実践計画は興味深く、まさに雄一郎先生の個性が生かされた論文でした。また、「未来へつなぐ教育計画」はテンプレートがあること、実践していなくても「計画」で書けるというお話から、「今からでも書ける」という安心感をもちました。



○ 論文執筆に向けた相談会

相談会では、論文を書いたことのある先生と、未経験の先生、オンラインで参加されている先生方を含めて小グループを作って話し合いました。論文についての悩みや不安だけでなく、普段の授業の話や今後の計画なども相談し合うことができ、どのグループも話が絶えず、笑顔あふれる会になりました。

論文の思い出話や、評価のポイント等、執筆者や主催者にしか分からないことをたくさん教えていただき、貴重な時間となりました。

